多文化が共生する教室で進める国際理解教育

東京都港区立東町小学校

次代を見据えた時に、
どのような教育活動が求められるのか。
先進的な活動を行う
事例を通して考える新コーナー。
今号は、外国籍の子どもも安心して
学べる環境を整え、
多文化共生の学校づくりを進める学校事例から、
これからのグローバル教育を考える。

オーストラリア、ブラジル、カナダ、中国、エジプト、イラク、イスラエル、フィリピン、ポーランド、ルーマニア、韓国、イギリス、ロシア、シリア、アメリカ、日本――東京都港区立東町小学校には、16カ国の子どもが通い、一緒に学ぶ。

1年生の体育の授業を見ると、体育館で跳び箱の練習中だった（**写真1**）。40人の子どもたちは自分のレベルに合わせて3つの列に分かれ、順番に跳び箱を跳んでいく。指導は、担任と国際学級講師によるチーム・ティーチングだ。国際学級講師は、外国籍の子どもに「Good job!」「Once more.」など声を掛け、時々英語で説明をしている。子どもからも「もっと前に手をついた方がいいよ」「遠くから助走しなよ」と日本語でアドバイスが飛び、外国籍の子どもがうなずく場面も見られた。

School Data

東京都港区立東町小学校

◎ 1913（大正2）年開校。月2回、「日本文化」として茶道、香道、和太鼓、百人一首、将棋など、日本文化を学ぶ時間を設ける。PTAだよりもPTAが作成する英語版がある。

校長 篠崎厚子／**児童数** 123人／**学級数** 8学級（うち特別支援学級2）／**所在地** 〒106-0047 東京都港区南麻布1-8-11／**TEL** 03-3451-7726／**URL** http://www1.r4.rosenet.jp/higashi-es/

外国籍の子も安心して学べる環境を

外資系企業や大使館が多く所在し、外国人が多く住む港区では、国籍を問わず、子どもが共に学び、共に高め合う機会の充実を目的とし、1年間の準備期間を経て、2012年度に東町小学校の全学級を「国際学級」とした。全学級に外国籍の子どもを受け入れるため、担任以外に、各学級に英語能力のある国際学級講師を配置。2人で学級運営に当たれるようにした。12年度は1学年1学級で、海外居住経験のある日本人4人、外国人2人（オーストラリア、カナダ）が1学級ずつ受け持った。

国語科、社会科、算数科、理科以外の教科は、学級全員で同じ授業を受ける。外国籍の子どもは、国際学級講師に担任の説明や指示を通訳してもらう。国語科、社会科、算数科、理科は原則、外国籍の子どもは別室での授業となる（**写真2**）。国語は、日本人の国際学級講師から日本語を学ぶ時間と、外国人の国際学級講師から英語を学ぶ時間とし、帰国後のための英語力をキープしつつ、日本語の基礎を学べるカリキュラムを作成した。また、算数は、国際学級講師が教科書の英訳本を使いながら指導する。計算や図形などは、英語で学んだ方が帰国後の学習がスムーズとなるからだ。

また、外国籍の保護者が子どもを安心し

Teachers

港区立東町小学校校長
篠崎厚子
しのざき・あつこ　「大人も子どもも迷ったら一歩進み、とにかく挑戦。努力すること」

港区立東町小学校
荒井綾菜
あらい・あやな　3学年担任。国際科。「国籍にかかわらず、一人ひとりの良さが生きるように指導したい」

港区立東町小学校
古川美代子
ふるかわ・みよこ　国際学級講師。4学年担当。「子どもや保護者に自分から心を開く。偏見を持たない。そうすれば国籍に関係なく、子どもは心を開いてくれる」

て通わせられる環境も整えた。学校だより、学年だより、給食の献立といった学校からの配布物は、全て英語版を国際学級講師が作成。英語での問い合わせには国際学級講師が対応するため、相談もしやすい。

篠崎厚子校長は、次のように話す。

「本校の教育活動への関心は、外国籍児童の保護者だけでなく、日本の保護者にも高まり、13年度の入学希望者が増えています。ただ、本校は、インターナショナルスクールではなく、日本の公立小学校ですから、日本の学習指導要領に沿って教育を行っています」

仲良くしたい気持ちが心の壁をなくす

子どもは、朝の会から帰りの会まで同じ教室で一緒に学び、遊ぶ。こうした日常的な異文化との触れ合いは、子どもの好奇心と意欲を大きく膨らませている。3学年担任の荒井綾菜先生は、「前年度の2年生の時にフィリピン人の転入生が来てから、子どもたちから世界の言葉を知りたいと声が上がりました。日直が朝の会で身近な言葉を外国語で調べてきて発表しています。英語だけでなく、中国語やドイツ語などもあり、関心の広がりを感じています」と話す。

中高学年では読み書きへの関心が高まっていったことから、港区が設定した「国際科」（全学年が週2時間行う英語活動）以外に、金曜の朝学習を「フォニックス（＊）」の時間とした。また、児童英検では、1・2年生全員がブロンズの正解率が8割を超え、中高学年の大半がシルバーの正解率が8割を超えた。「日常的に英語を耳にすることで、聴く力は特に優れているようです」と荒井先生は言う。

こうした英語への関心以上に、教師が驚くのは子どもたちの行動だ。体育での着替えが分からずに困っていた外国籍の子に周りの子が身振り手振りで教える姿や、休み時間に外国籍の子を校庭に連れ出して遊ぶ姿が見られるという。国際学級講師の古川美代子先生は「入学後、しばらくしてから外国籍の子どもに『Did you make good friends here?』と聞くと、挙がる名前はほぼ日本人です。言葉が通じなくても気が合い、友だちとなるのは素晴らしいと思います」と話す。更に、篠崎校長はこう語る。

「文化の違いも国籍の違いも、子どもは何の違和感も持っていません。違いを感じて、壁を作るのはむしろ大人なのではないかと、はっとさせられます。本校の子どもは転入生が来ると大喜びし、友だちが増えてうれしい、親切にしようとする姿は以前から見られました。そうした気持ちがあるからこそ、国籍が違っても、一緒に学び、遊ぶのだと感じます」

国際学級は区の政策であり、どの学校でも出来ることではないかもしれない。ただ、誰もが安心して学べる学校であり続けることが、国籍に関係なく個を発揮させ、互いを認め、学び合う姿勢を育むことにつながることを、同校の取り組みが示している。

写真1　1年生の体育の授業。終盤、跳び箱のテストが行われ、跳べなかった子には、周りの子どもたちから口々にアドバイスや声援が飛んでいた

写真2　国語科の時間に、1年生の外国籍の子ども7人が、別室で外国人の国際学級講師から英語の授業を受けている様子

＊プロフィールは2013年3月時点のものです

＊英語の綴りと発音との間の規則性を示して、正しく読むための学習